

窪菌晴夫（国立国語研究所）

kubozono@ninjal.ac.jp

【要旨】甌島方言は長崎（市）方言や鹿児島（市）方言と同じく2つのアクセント型を持つ2型アクセント体系であるが、その体系は本土の姉妹方言とは異なる独自の発達を遂げる一方で、方言内の各集落もまたそれぞれ異なる変化を遂げている。モーラを単位としてアクセント（高低の配置）を計算する点において鹿児島方言とは異なり、アクセントを語末から数える点において長崎方言とは異なる。またアクセントの山が2つ現れる「重起伏」という特徴を持つ点において、いずれの姉妹方言とも異なる。

甌島方言のアクセントについては上村孝二氏が昭和12年に行った調査の記録が残っており、この記述と現在の調査データを比較することにより、各集落のアクセント体系が過去80年間にどのように変化したかを知ることができる。それらの変化の一つが音節性の発達であり、もう一つが重起伏体系の発生である。このように甌島方言を詳細に分析することにより、九州西南部において音節や重起伏の特徴が発生してきた過程を具体的に推定することができる。

## 1. はじめに

本発表では、薩摩半島の西30～40kmの東シナ海に浮かぶ甌島列島（上甌島、中甌島、下甌島）で話されている「甌島方言」のアクセント体系を、現地調査をもとに、2つの姉妹方言（鹿児島（市）方言、長崎（市）方言）および東京方言との比較により分析する。甌島方言は、母語話者が約2,000名（推定）であるが、若い世代への継承がほとんどなされていないため消滅危機方言の一つとなっている。話者数が少ない一方で、地域差が著しいことでも知られる（窪菌 2012b, Kubozono 2016, 2019）。

甌島方言は鹿児島方言や長崎方言と同じく、九州西南部に特徴的なA型とB型の2型アクセント体系（平山 1951、木部 2000、窪菌 2006）を有し、単語ではなく文節をドメインとしてアクセント（高低）が付与される。複合語アクセントも、前部要素が複合語全体のアクセント型（以下「A型」）を決定するタイプの規則(left-dominant rule: LDR)に従っており、この点においても鹿児島・長崎の両方言と特徴を同じくし、また東京方言とは異なっている。その一方で、モーラを基調として数えてA型を決定するという点では鹿児島方言と異なり、語の後ろから数えるという点では長崎方言と異なっている。さらに、比較的長い語において複数のアクセントの山（重起伏）が現れるという点ではいずれの方言とも異なっている。本発表で問題となる音声特徴を甌島方言（平良集落を除く）を中心に比較してみると、(1)のような方言間の異同が見られる。以下では甌島方言を甌島（平良）と甌島（主流＝他の集落）に分けて記述する。

本発表では甌島方言のアクセント体系を上記2つの姉妹方言と比較すると同時に、甌島方言内におけるバリエーションと歴史的変遷を分析することにより、この消滅危機方言において単起伏体系から重起伏体系が発達した過程と、モーラ性の体系から音節性の体系へと変化している過程を考察する（歴史については1937年（昭和12年）に全島アクセント調査を行った甌島中甌集落出身の上村孝二氏の記述（上村 1937, 1941）が貴重な資料である）。このような視点から甌島方言を詳細に分析することにより、九州西南部において音節や重起伏の特徴が発生してきた過程を具体的に推定することができる。

(1) 方言間の異同

方言	鹿児島	甑島 (平良)	甑島 (主流)	長崎	東京
特徴					
アクセント体系=2型	○	○	○	○	×
ドメイン=文節	○	○	○	○	×
複合語アクセント=LDR	○	○	○	○	×
計算の方向性=後ろから	○	○	○	×	○
韻律単位=モーラ	×	○	○	○	○
アクセントの山=重起伏	×	×	○	×	×

2. 重起伏

甑島方言のA型とB型は、モーラ/音節の違いを除くと鹿児島方言と同じであり、A型は語末(文節)から2つ目が高くなり、B型は語末(文節末)が高くなる<sup>2</sup>。複合語は上述のLDRに従い、最初の形態素のA型を継承する。(2)に示すように、甑島の中でも平良集落(中甑島の唯一の集落)だけは鹿児島方言と同じくアクセントの山は一つしか現れないが、他の集落は3~4モーラ以上の長さの語において二つの山が現れる(以下、[はピッチの上昇位置を、]は下降位置を表す。実際の発音については窪菌他(2016)「甑島方言アクセントデータベース」参照)。

(2) 鹿児島方言と甑島方言の比較

ア型	鹿児島方言	甑島(平良)	甑島(主流)	上村(1937)	グロス
A型	[ナ]ツ	[ナ]ツ	[ナ]ツ	[ナ]ツ	夏
	ナツヤ[ス]ミ	ナツヤ[ス]ミ	[ナツ]ヤ[ス]ミ	ナ[ツ]ヤ[ス]ミ	夏休み
B型	ハ[ル]	ハ[ル]	ハ[ル]	ハ[ル]	春
	ハルヤス[ミ]	ハルヤス[ミ]	[ハルヤ]ス[ミ]	ハ[ル]ヤス[ミ]	春休み

ここで重起伏の二つの山を語頭からH1, H2と呼ぶと、短い語に現れる単一の山は長い語の語末付近に現れる山(H2)に対応している。また上村(1937, 1941)では、長い語に現れるH1は音声的に副次的な山として記述されており、またこのトーンはA型とB型のいずれにおいても語頭から2モーラ目に付与されていることから、歴史的には語頭(句頭)を表す境界トーン(boundary tone)として二次的に発生したことがうかがえる<sup>3</sup>。ちなみに上村(1937, 1941)においても、平良集落は他集落と異なり単起伏の体系として記述されており、両者の違いは80年前には既に存在していたことがわかる。

語頭、句頭あるいは文頭を示す境界トーンは、日本語の中でもけっして珍しいものではない。東京方言では句頭を示すためにピッチが上昇する現象が観察され<sup>4</sup>、語句末の音節が高くなる1型アクセントの小林方言(宮崎県)では、しばしば文頭もしくは句頭が高くなる(直後にピッチが下降する)<sup>5</sup>。通言語的に見ても、この種の境界トーンは珍しくない(Hyman 2017)。

3. モーラ性と音節性

(2)から鹿児島方言と甑島方言の対応関係は明白であるが、その一方で両者はアクセントの山を決める際に音節とモーラのいずれを使うかという点において明確に異なる。(3)の例からもわかるように、鹿児島方言のA型は語末から二つ目の音節が高くなり、B型は語末音節が高くなる。一方、甑島方言では語末から二つ目のモーラが高くなるか(A型)、語末のモーラが高くなるか(B型)という特徴を持つ(平良方言については後述)。同じように語末から数えていても、音節を数えるか(鹿児島方言)、モーラを数えるか(甑島方言)という違いが存在するのである。

姉妹方言の長崎方言を含め、日本語の方言のほとんどはモーラを基調としていることから、甌島方言はこれらの方言と特徴を共有していることになる。

(3) 音節とモーラ

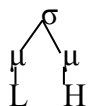
ア型	鹿児島方言	甌島方言（平良）	甌島方言（主流）	グロス
A 型	[ア]メ	[ア]メ	[ア]メ	飴
	ナ[ツ]オ	ナ[ツ]オ	ナ[ツ]オ	夏男
	[バ]レー	バ[レ]ー	バ[レ]ー	バレエ
	[ジ]カン	ジ[カ]ン	ジ[カ]ン	時間
	アカ[シン]ゴー	アカシン[ゴ]ー	[アカ]シン[ゴ]ー	赤信号
B 型	ア[メ]	ア[メ]	ア[メ]	雨
	ハル[オ]	ハル[オ]	[ハ]ル[オ]	春男
	ミ[カン]	ミ[カン]	[ミ]カ[ン]	蜜柑
	アオシン[ゴ]ー	アオシン[ゴ]ー	[アオシン]ゴ[ー]	青信号

では甌島方言において音節が何ら役割を果たしていないかという、そういうわけではない。アクセントの High tone（重起伏の場合には H2）は特定のモーラに付与されるが、このモーラが重音節の第二モーラである場合には、音節を単位とした調整が行われる。面白いことに、この特殊拍だけが高く発音される有標な構造(5a)を避けるために、平良集落と他の集落では異なる方策が用いられている。平良集落では(5b)に示す High tone spreading により音節全体で High tone を担うようになり、一方他の集落では(5c)に示すように High tone を重音節の第 2 モーラから第 1 モーラへ（つまり特殊拍から自立拍へ）移すことにより、(5a)の有標構造を避けている<sup>6</sup>。前者はアフリカの言語によく観察される現象であり（Hyman 2007）、後者は東京方言（例：ロン]ドン→ロ]ンドン）などに見られる現象である。ちなみに(5c)の現象は上村の 80 年前の記述でも既に指摘されており、それ以前から甌島方言にある規則であることがわかる。

(4) 音節性の発達

ア型	鹿児島方言	甌島方言（平良）	甌島方言（主流）	グロス
A 型	[プー]ル	[プー]ル	[プ]ール	プール
	[パン]ツ	[パン]ツ	[パ]ンツ	パンツ
B 型	ミ[カン]	ミ[カン]	[ミ]カ[ン]	蜜柑
	アオシン[ゴ]ー	アオシン[ゴ]ー	[アオシン]ゴ[ー]	青信号

(5) a. 有標な構造(contour tone)



b. High tone spreading

- プ[ー]ル → [プー]ル
- パ[ン]ツ → [パン]ツ
- ミカ[ン] → ミ[カン]

c. High tone shift

- プ[ー]ル → [プ]ール
- パ[ン]ツ → [パ]ンツ

このように甕島方言においても音節は一定の役割を果たしているのであるが、注目すべきは(4)に見られる鹿児島方言と甕島平良方言の共通性である。(3)と(4)を比較すると、鹿児島方言は一貫して音節で処理しているのに対し、平良方言はモーラを基調としながらも、(5a)の有標な構造を避ける手段として音節を使っていることがわかる。つまり(5b)の High tone spreading によって、モーラを補完する単位として音節を用いているようになってきている。(5b)が通言語的に一般性の高い規則であることを考慮すると、この規則によってモーラ的な体系が音節をも用いる体系へと変化したと見るができる。通時的に見るならば、(3)-(4)に見られる平良方言の体系はモーラ方言から音節方言へ移行する過渡期の体系と見るができるのである。

この知見を九州西南部に広がる2型アクセント方言群の中で捉えてみると、この方言群の祖語は現在の長崎方言と同じようにモーラを基調とする体系を有しており、そこから(5b)に示した特定の条件下で音節という単位が用いられるようになり(甕島平良方言)、さらにその条件が外れて(つまり再分析が起こって)、現在の鹿児島方言に見られる音節主体の体系が成立したと推定することができる(イタリックは変化した部分を示す)。

#### (6) 音節性の発生・発達

ア型	鹿児島・甕島祖語	甕島方言(平良)	鹿児島方言	グロス
	モーラ性	モーラ性+音節性	音節性	
A型	[ア]メ	[ア]メ	[ア]メ	飴
	ナ[ツ]オ	ナ[ツ]オ	ナ[ツ]オ	夏男
	バ[レ]ー	バ[レ]ー	[バ]レー	バレ
	ジ[カ]ン	ジ[カ]ン	[ジ]カン	時間
	プ[ー]ル	[プー]ル	[プー]ル	プール
	パ[ン]ツ	[パン]ツ	[パン]ツ	パンツ
B型	ア[メ]	ア[メ]	ア[メ]	雨
	ハル[オ]	ハル[オ]	ハル[オ]	春男
	ミカ[ン]	ミ[カ]ン	ミ[カ]ン	蜜柑
	アオシンゴ[ー]	アオシン[ゴー]	アオシン[ゴー]	青信号

#### 4. 重起伏とモーラ・音節

モーラ体系から音節体系が発達してきたという分析は、モーラを基調とする甕島方言において音節の役割が徐々に強化されてきている事実とも符合する。以下に述べるように、この傾向は重起伏の発達過程に特に顕著に見られる(Kubozono 2016, 2019)。

第2節で、重起伏は甕島方言で発達した特徴であると結論付けたが、歴史的に見ても共時的に見ても、語頭(句頭)に現れるアクセントの山(H1)は語末に現れる山(H2)には見られない大きな揺れを示す。ここで(a)上村(1937, 1941)が記述した80年前の甕島主流方言、(b)現在の甕島・桑之浦方言、(c)現在の甕島・中甕方言の3つの体系を比較すると、語頭付近に見られる一つ目の山(H1)の実現には(7)のような違いがみられる(ちなみに上村は中甕集落の出身であることから、(a)と(c)は同一の集落の年代差を示すことになる)。(c)は中甕集落だけでなく里集落や手打集落など甕島の多くの集落に見られる。(7)の違いを例示すると(8)のようになる。

##### (7) a. 上村(1937, 1941)

- ・ H1はA型語彙でもB型語彙でも第2モーラに置かれる(よってA型の区別には関与しない)。この第2モーラは自立拍でも特殊拍でもかまわない。
- ・ ただしH2と衝突する場合には、H1は第1モーラに移動する。

b. 桑之浦集落（現在）

- ・ H1 は A 型語彙でも B 型語彙でも語頭の 2 モーラ（第 1&第 2 モーラ）に付与される（よって A 型の区別には関与しない）。
- ・ H2 と衝突しても H1 の左方移動(High tone shift)は起こらない。
- ・ 2 モーラ目が 3 モーラ目と同じ音節に属する場合には、3 モーラ目にまで拡張する。

c. 中甌集落（現在）

- ・ H1 は H2 と連動し、H2 との間に 1 音節空ける形で付与される（よって A 型の違いを示しうる）。
- ・ H1 と H2 が衝突することはない。

(8) 甌島方言重起伏形の多様性（変遷）

ア型	a. 上村(1937)	b. 桑之浦集落	c. 中甌集落	グロス
	H1=第 2 モーラ	H1=第 1&2 モーラ	H1~H2 間=1 音節	
A 型	[ア]マ[ザ]ケ	[アマザ]ケ	[ア]マ[ザ]ケ	甘酒
	ナ[ツ]ヤ[ス]ミ	[ナツ]ヤ[ス]ミ	[ナツ]ヤ[ス]ミ	夏休み
	ジョ[ー]キ[セ]ン	[ジョー]キ[セ]ン	[ジョー]キ[セ]ン	蒸気船
	カ[ザ]イ[モ]ン	[カザイモ]ン	[カ]ザイ[モ]ン	飾り物
	カ[ザ]リ[モ]ン	[カザリ]モ]ン	[カザ]リ[モ]ン	飾り物
	ニ[ギ]ー[メ]シ	[ニギーメ]シ	[ニ]ギー[メ]シ	握り飯
	ニ[ギ]リ[メ]シ	[ニギリ]メ]シ	[ニギ]リ[メ]シ	握り飯
B 型	[オ]ト[コ	[オトコ	[オ]ト[コ	男
	ハ[ル]ヤス[ミ	[ハル]ヤス[ミ	[ハルヤ]ス[ミ	春休み
	ニ[ホ]ン[シャ	[ニホンシャ	[ニ]ホン[シャ	日本車
	ニ[ホ]ンシャ[ガ	[ニホン]シャ[ガ	[ニホン]シャ[ガ	日本車が
	ニ[ワ]トイ[ガ	[ニワ]トイ[ガ	[ニワ]トイ[ガ	鶏が

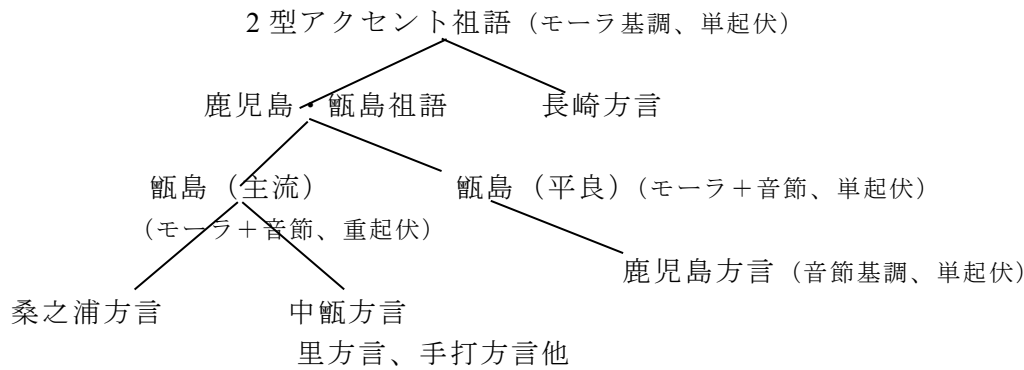
上村が記述した 80 年前の体系(a)では、H1 は自立拍・特殊拍の区別に関わらず語の第 2 モーラに付与されている。つまりこの体系では H1 が音節に関係することはなかった。これに対し現在の桑之浦集落の体系(b)では第 2 モーラと第 3 モーラが同じ音節（重音節）に属する場合に H1 が第 3 モーラにまで拡張する（[カザイモ]ン vs. [カザ]リ[モ]ン）。この点において、(a)の体系より音節性が高くなっている。

中甌をはじめとする甌島の他の集落の体系(c)では、(b)の体系とは異なる発達をとげており、H1 が H2 に連動する形で現れる。つまり H2 と衝突を起こさないように、H2 との間に常に 1 音節分の低音調を保つ形で H1 が実現する（これはアフリカの Shona 語などに見られる特徴である(Myers 1990))。この「1 音節空ける」という特徴がまさに音節に依存した特徴であり、音節の機能強化を示すものである。

5. まとめ

以上、重起伏と音節性を中心に甌島方言のアクセント体系を分析したが、歴史的な観点から見ると次のような系統図が推定される。全体的には単起伏から重起伏へ、モーラ体系から音節体系へという変遷である。

(9) 九州西南部 2 型アクセントの歴史的変遷



参考文献

- Haraguchi, Shosuke (1977) *The tone pattern of Japanese: An autosegmental theory of tonology*. Tokyo: Kaitakusha.
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』学界の指針社。
- Hyman, Larry M. (2007) Universals of tone rules: 30 years later. In Riad, T. and C. Gussenhoven (eds.), *Tones and tunes, Vol. 1: Typological studies in word and sentence prosody*, 1-34. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Hyman, Larry M. (2017) Comments on Kubozono's talk 'Secondary high tones in Koshikijima Japanese'. JK Satellite Workshop on 'Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean', held at the University of Hawaii, Manoa, October 11, 2017.
- 上村孝二 (1937) 「甑島方言の研究」『満鐵教育研究所研究要報』11. 319-348.
- 上村孝二 (1941) 「甑島方言のアクセント」『音声学協会会報』65-66号, 12-15.
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版。
- 窪菌晴夫 (2006) 『アクセントの法則』(岩波科学ライブラリー118)、岩波書店。
- Kubozono, Haruo. (2012a) Word-level vs. sentence-level prosody in Koshikijima Japanese. *The Linguistic Review* 29, 109-130.
- 窪菌晴夫 (2012b) 「鹿児島県甑島方言のアクセント」『音声研究』16(1). 93-104.
- Kubozono, Haruo (2016) Diversity of pitch accent systems in Koshikijima Japanese. 『言語研究』150. 1-31.
- Kubozono, Haruo (2019) Secondary high tones in Koshikijima Japanese. *The Linguistic Review* 36-1 : *Special Issue on "Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean"*, 25-50.
- 窪菌晴夫他 (2016) 甑島方言アクセントデータベース。http://koshikijima.ninjal.ac.jp/
- Myers, Scott P. (1990) *Tone and the structure of words in Shona*. New York: Garland Press.

<sup>1</sup> 本研究は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」および日本学術振興会科研費 KAKENHI 19H00530, 16H06319 and 17K18502 の研究成果を報告したものである。

<sup>2</sup> この表層音形的一致は長崎方言には見られないものであり、この点において甑島方言は長崎方言より鹿児島方言により高い近似性を示している。

<sup>3</sup> 甑島の多くの集落では、この境界トーンが語彙的なトーンに発展しており、このトーンの実現領域が A 型と B 型の区別に役立っている (Kubozono 2012a, 窪菌 2002b)。

<sup>4</sup> 語頭 (句頭) が低く始まるため、音韻論的には initial lowering ともいわれる (Haraguchi 1977)。

<sup>5</sup> たとえば「男」という語を単独で発音するとオト[コとならんで、[オ]ト[コという音調がしばしば観察される。文中ではこの語頭ピッチ下降が消えることから、文頭を表す境界トーンであることがわかる。

<sup>6</sup> 甑島方言 (主流) では(5c)の規則が A 型の語だけに適用される。B 型の語にまで適用されると、B 型の語が A 型の語と同じ A 型を持つようになってしまう (たとえばミカ[ン→ミ[カ]ンとなる) ため、A 型の区別を保つために A 型の語にだけ適用されたと考えられる (窪菌 2012b)。